

## 成熟した環境社会をめざして(環境楽習館「ゆめほたる」の二年間)

鈴木榮一(環境楽習館「ゆめほたる」所長)

### はじめに

環境楽習館「ゆめほたる」は、平成21(2009)年4月に開業した国崎クリーンセンターの環境啓発施設として、同5月に開館しました。地域の皆さんや次世代を担う若者たちと共に、地球環境の視点から社会を考える活動を続け、はやくも3年度目を迎えようとしています。本発表は、これまでの活動を振り返り、これからの本施設のあり方やビジョンを示そうというものです。



### 環境活動について

開館初年度は11ヶ月で1万2千人あまり、今年度は11月末時点ですでに1万を超える利用者を数えます。これは幅広い環境啓発活動を繰り返してきた成果と申せませんが、中でも里山にかかわる野外活動(ヒメボタルや野鳥などの自然観察)は、日本一の里山と言われる黒川地域に位置し、施設内にも里山を有していることから、本施設の目玉的な活動として展開しています。

昨年9月の開館記念講演会では、「生物多様性の危機と里山」というテーマで、人と自然の博物館館長・岩槻先生と研究部長・服部先生にご講演いただき、里山が日本人の心とも言うべきものであることや人と自然の共生について多くの示唆をいただきました。本年度は人と自然の博物館との連携講座として、主任研究員・八木先生のご指導のもと「ヒメボタル観察会インストラクター養成コース(全6回)」を開催し、ヒメボタル観察のリーダーを養成。現在、参加メンバーが自主的な活動を開始しています。また、ジオパークでご活躍の主任研究員・先山先生に鉱石についてレクチャーいただいたり、日本野鳥の会のメンバーによる観察会などを開催したりしています。

このような自然系の活動の他、本施設ならではの取り組みとして、セブンイレブンみどりの基金からご助成をいただき「ごみの行方をたずねて」というエコツアーを実施しています。本年度は大阪湾のフェニックス・最終処分場と家電製品のリサイクル工場、そして食品廃棄物のリサイクルと放置森林を牧場として復活させた里山の見学ツアーを行いました。また、リサイクル品を用いた各種クラフト系のワークショップ、自転車や家具の修理教室、環境マンガ展示会など、様々な企画を実施。少し自然系から離れるのかもしれませんが、廃棄物を素材に芸術作品を創造するアーティストたちによるワークショップやシンポジウムも開催し、アートパワーで環境問題を解決する試みも実施しています。

### これからのビジョンとミッション

本施設の里山には、エドヒガンザクラの群生地、間歩(まぶ)と言われる廃鉱とそこに住む稀少なテングコウモリ、深夜幻想的に舞うヒメボタル、里山の象徴である台場クヌギや炭焼窯跡などがあります。このような素晴らしい素材を持つ里山を、日本人が古来より自然とうまく共生してきた循環型社会のお手本として、また環境学習の実践教材として活用していく計画です。今後、本施設の里山をモデルケースに、現代人にフィットした里山の知恵を提供する環境学習システムをデザインします。また、里山が日本人古来の循環型社会の象徴であるように、国崎クリーンセンターにおけるごみ燃焼の熱エネルギー回収(サーマルリサイクル)や素材回収(マテリアルリサイクル)も現代における循環型社会の象徴と言えます。先人の叡智に学び、廃棄物として捨てられる物が、より良い形で循環することができる工夫と知恵を提供し、自然との共生を啓発すること、それが国崎クリーンセンター啓発施設・環境楽習館「ゆめほたる」のミッション(使命)なのです。